古くから人々が畏敬（いけい）の念を抱き、愛し続けてきた

富士山を世界文化遺産に

～構成資産紹介～

富士山の世界文化遺産登録に向け、国や静岡・山梨両県、関係市町ではこれまでさまざまな活動をしてきました。４月にユネスコ世界遺産委員会の諮（し）問機関であるイコモスは、世界遺産委員会へ『富士山は世界文化遺産への登録が適当』との勧告をしました。今月下旬に開催される世界遺産委員会で、いよいよ富士山は世界文化遺産へ登録される見込みです。

富士山周辺には、富士山の文化的価値を証明する資産が数多く存在します。そこで今回は、富士山ネットワーク会議に加盟している４市１町（裾野市、富士宮市、富士市、御殿場市、小山町）にある富士山の構成資産などを紹介します。

◆ 富士山の文化的価値

富士山は荘厳で美しい姿から、信仰の対象となり、さまざまな芸術作品を生み出し、日本と日本文化を象徴する名山としての世界的な地位を確立してきました。このことから、富士山は世界文化遺産にふさわしい価値を持っていると考えられています。

◆ 構成資産とは？

古くから信仰の対象となり数多くの芸術作品を生み出してきた富士山。その富士山の文化的価値を証明するのが、周囲にある神社や登山道など 25 件の構成資産です。これらの資産は、富士山とともに国の文化財に指定され、富士山の世界文化遺産登録において、登録資産となっています。

山頂の信仰遺跡群

木花之佐久夜毘売命をまつる奥宮が鎮座

山頂には、富士山本宮浅間大社奥宮・同東北奥宮（久須志神社）や金明水・銀明水などの宗教施設があり、また、地形のなかには内院（火口）や安河原（賽の河原）などの宗教的な名称がつけられた所があります。峰々は「八葉」や「八峰」と総称され、かつて山頂部は曼荼羅世界になぞらえて考えられていました。

大宮・村山口登山道（現在の富士宮口登山道）

曼荼羅図にも描かれたかつての登山道

（富士宮市）

富士山は、平安時代末期に登山が行われるようになり、14 世紀初めには山中で修行を行う修験者が村山を拠点として集まるようになったと考えられています。中世には、16 世紀作とされる「絹本 著色 富士曼荼羅図」には道者が大宮・村山口から富士山に登る様子が描かれ、修験者・先達に導かれた道者が数多く登拝するようになったと考えられます。

須山口登山道（現在の御殿場口登山道）

富士山への信仰を今に伝える古道

（御殿場市印野・中畑）

須山浅間神社（裾野市）を起点に、御殿場市印野・玉穂地先を通り、富士山頂に至る道です。修験道の総本山・京都聖護院の道興准后も、1486 年に須山口から富士のふもとに至る際に歌を詠んでおり、また富士山を信仰する富士講が広まった江戸時代には多くの人々に利用されました。明治時代になると衰退しましたが、富士山への信仰を今に伝える古道として、富士山の価値を表す重要な要素とされています。

須走口登山道

室町時代から続く登山道

（小山町須走）

富士浅間神社を起点とし、八合目で吉田口登山道と合流し山頂東部に至る登山道です。七合目（標高 2,925 m）の沿道から富士山への奉納物として現存最古の事例である 1384 年の記念銘を持つ懸仏が出土しているほか、『勝山記』の 1500 年の記事には本登山道に道者が集中したとの記述が見られます。1707 年の宝永噴火の際には大きな被害を受けましたが、翌年には復興を完了し、多くの道者、富士講信者による登拝が行われるようになりました。

富士山を世界文化遺産に

富士山本宮浅間大社

全国 1300 余社ある浅間神社の総本宮

（富士宮市宮町）

浅間神社は富士山を神として祀（まつ）ったものであり、富士山本宮浅間大社は最も早く成立し、全国の浅間神社の総本宮とされます。社伝によれば、山宮から現在地に移転されました。登拝が盛んになるにつれて、村山の興法寺とともに大宮・村山口登山道の基点となりました。「絹本著色富士曼荼羅図」には、湧玉池（わくたまいけ）で垢離（こり）（禊（みそぎ））をとり、富士山に登る道者の姿があります。

山宮浅間神社

遥拝所から富士山を望む

（富士宮市山宮）

山宮浅間神社には富士山を遥拝するための遥拝所があります。これは、古い富士山祭祀（し）の形をとどめているものと考えられています。遥拝所の周囲には溶岩れきを用いた石塁が巡っています。遥拝所内部には、祭壇（だん）や祭祀列席者の座席と考えられる石列が設けられています。浅間大社の社伝によれば、浅間大社の前身であるとされています。

村山浅間神社

修験道の中心地

（富士宮市村山）

村山浅間神社は、富士山における修験道の中心地であり、明治時代に廃されるまで、興法寺という寺院がありました。鎌倉時代には、末代（まつだい）上人に関連する修行者により寺院が成立し、「絹本著色富士曼荼羅図」が描かれた 16 世紀には、修験者や道者が集まっていたと考えられています。近世には、村山三坊が興法寺や集落とともに、大宮・村山口登山道や山頂の大日堂を管理しました。

須山浅間神社

須山口登山道の起点

（裾野市須山）

須山浅間神社は須山口登山道の起点となった神社で、江戸時代の富士講をはじめ富士山頂を目指した多くの人が立ち寄った場所です。

拝殿手前右側にある覆い屋の中の古宮と呼ばれる小社は、1611 年に建立されたものと考えられています。工事の記録を示した 1524 年の棟札も残されています。境内の樹齢 400 ～ 500 年以上とされる約 20 本の杉の巨木が、須山浅間神社の歴史を物語るとともに、厳粛（しゅく）な雰囲気を漂わせています。

冨士浅間神社（須走浅間神社）

須走口登山道の起点

（小山町須走）

須走口登山道の起点となる神社で、富士講信者が多く立ち寄り、33 回を一つの区切りとする登拝回数などの記念碑（ひ）が約 70 基残されています。社伝によれば、807 年に造営したと伝えられています。1707 年の宝永噴火では大きな被害を受けましたが、1718 年に再建され、修理を重ねながら現在に至っています。社務所には、「御鎮座千二百年記念資料館」が併設され、富士講や宝永噴火に関する歴史史料が展示されています。

人穴富士講遺跡

溶岩洞穴と 200 基を超える碑塔群

（富士宮市人穴）

人穴富士講遺跡には、溶岩洞穴「人穴」と富士講講員が建立した 200 基を超える碑塔などがあります。富士講の開祖とされる長谷川角行（かくぎょう）は、人穴にこもって修行し、この地で亡くなったとされています。人穴は角行の修行の地・入滅の地として信仰を集め、先達の供養碑や記念碑などの碑塔を建立することも多く行われました。

白糸ノ滝

国の名勝および天然記念物

（富士宮市上井出）

富士山の湧水（1 日平均 15 ～ 16 万㎥）が約 120m にわたって噴出し、数百条の白糸が垂れているように見えます。

富士講関連の文書によれば長谷川角行が人穴での修行と合わせて水行を行った地とされ、富士講信者を中心に人々の巡礼・修行の場となりました。また、景勝地としても有名であり、『白糸瀑（ばく）図』などの絵画や源頼朝の作とされる和歌などの題材にもなっています。

関連する文化財

鈴川の富士塚

富士登山の安全祈願をした塚

（富士市鈴川西町）

鈴川の富士塚は、江戸時代ごろ富士登山の前に身のけがれをはらう場であったと考えられています。登山者は、海岸で海水を浴びて心身の汚れを落とし、浜から玉石を持って砂山に積み上げ、登山の安全を祈願したと伝えられています。その後、この塚から旧吉原宿・村山道を通り、富士山頂を目指したといいます。

現在の富士塚は、1976 年に地元の古老の記憶に従って復元されたものです。